HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教師の変容と環境要因 ： 小学校教師の言語教師認知研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	中村, 香恵子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第12448号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63407
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kaeko_Nakamura_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　　氏名：中　村　香　恵　子

学位論文題名

教師の変容と環境要因−小学校教師の言語教師認知研究

本研究は，小学校教師の言語教師としての認知的特徴と彼らを取り巻く環境との関係を明らかにし，それによってどのような環境要因によって教師がどう変化しているか解明することを目的としている。本論文は，８章からなり，参考文献と２点の付録がつけられている。以下，各章の内容を記述する。

第１章では，自身の経験を語ることで研究の動機と視座を確認し，さらに，我が国の小学校英語教育の導入に至る背景を説明するとともに，小学校教師文化の特徴と彼らの英語教育への不安について述べている。発達心理学者ブロンフェンブレナーのライフコース上における変化が人の発達上の特徴を明らかにするとする考え方を引いて，小学校への英語教育導入という歴史的瞬間を捉えて本研究が実施されたことが教師認知考察の基礎研究としての独自性をもたらしていると説明する。また，得られた知見をもとに今後の小学校英語教育構築を目指して教師支援の在り方を検討し，英語教育全体に貢献する点に本研究の重要性があると著者は述べている。

第２章の先行研究の概要では，近年の言語教師認知研究の特徴として，教師と環境との関係に対する興味，全体的な教師理解への志向，情緒面への関心，混合研究法の増加をあげている。次に，教師環境要因に関わる言語教師認知研究を，生態学的システム理論の枠組から概観し，その個々の枠組を超えて教師の内面の全体像を捉える研究の必要性を主張している。

第３章では，予備調査について概説している。本研究の発端となった著者の行ってきた諸研究では，小学校教師はそれぞれ独自の教育観や教師像を持ち，それが外国語活動に関する教育観や実践に影響を与えていることが示唆されていた。これに続く本研究の予備調査では，言語教師としての小学校教師の特徴を明らかにするために，グループ討議による質的研究と質問紙調査による量的研究の両方を用いて，教師をとりまく環境要因の階層の違いによって，個人の異なる面に影響があることを明らかにした。予備調査の結果から，多様な階層の環境要因にさらに注目する必要性を主張する。また，それぞれの研究で用いた研究法や分析方法を本研究にも用いていると説明している。

第４章では，研究方法について概説している。まず，研究課題を「小学校教師た

ちに共通する言語教師としての特徴は何か」，「異なった環境にある小学校教師たちに共通する言語教師としての特徴は何か」，「異なった環境にある個々の小学校教師の言語教師としての特徴は何か」に設定し，全体像としての教師をとらえるために，認知・感情・行動の３領域に着目して，個人をとりまく環境をマイクロシステム(個人が直接経験している環境)，メゾシステム(個人が参加する２つ以上の行動場面の相互作用)，エクソシステム(積極的な参加者ではないが影響がある環境)，マクロシステム(文化全体のレベルで存在する一貫性や信念体系)の４つの階層から考察すると説明している。また，混合研究法を実施する際に，質的研究のための紙幅を効率的に使うことを目的として，テキストをコーディングして分析した内容をJoint Displayと呼ばれる手法で提示することを提案している。

第５章では，本研究１について報告している。小学校教師の英語教育に関する特徴を，予備研究で作成した質問紙を用い，インターネット調査と郵送法で279名の小学校教師に対して調査した。教師の認知面・感情面・行動面の様子と環境要因との関わりを分析した。その結果，学習方略に関わるビリーフは環境による影響を受けにくいが，学習動機や国際的志向性などの感情面は性差や英語力などの個人差要因で差があり，中でも学習動機は指導経験・役割などマイクロシステムの影響で変化しやすいことが示唆された。また，外国語活動授業実践は指導観よりも学習者としてのビリーフに基づく可能性を指摘している。職場環境要因としては，有能性の高い環境が認知面・感情面に，関係性の高い環境が行動面に関係することが示唆された。一方，文化・社会的背景では教師間に差がなく，本研究が対象とした教師は英語教育において同一の文化・社会的文脈にいると判断された。しかし，こうした結果は平均的教師像を示しており，現実を深く理解するためには具体的な文脈でより詳細な分析が必要であるとしている。

第６章では，本研究２の報告として，異なる環境の小学校教師に共通する特徴を述べている。地域的な要因による学校環境と小学校教師の言語教師としての特徴の関係を，質問紙調査から得た量的データを質的調査で得た言語データで補完しつつ検証した。地域環境に特徴のある２校を抽出し，英語の授業担当教師への質問紙調査，およびそれぞれの学校の教師３名に対するインタビューとグループ討議を実施した。２校は英語授業実践上，教師へのサポート体制の特徴が異なっており，動機づけに関わる自律性・関係性・有能性を視点として分析した。その結果，自律性の高い環境が教師の関係性および効力感，あるいは教師の外発的な学習動機の高まりと関係があることが示唆された。今後の課題として，教師と環境との複雑な相互作用の全貌を解明するために，個々の教師に対するより詳細な質的研究が必要であるとしている。

第７章で報告している本研究３では，異なった環境の小学校教師の特徴を調べた。インタビューとグループ討議による質的調査を実施し，得られた結果を質問紙調査による量的データを参照しながら分析した。調査にあたっては，環境要因の違いを明確にするために，本研究２で収集したデータの他に，地理的に孤立した環境にある教師も調査対象とした。分析の結果，教師の自律性と教師間の協力体制の関連，教師間の協力体制と自己効力感・学校効力感との関連，英語指導意欲と英語習得の

自信との関連，子供の変化の認識と教師への期待感など外的要因の関連，学習者として得たビリーフと授業実践の関連，教職専門教育で得た知識と学習者ビリーフとの関連，英語授業経験と生徒主体の指導観の関連，教師の協働と指導観の変化の関連，授業サポート体制と教師のサポート依存度の関連，小学校外国語活動の独自性，地域の国際性と教師の国際的指向性あるいは教育研究機会と教師の専門性の関連，教師間の関係性の高さと教師の成長との関連などの可能性が示唆された。

第８章では，以上の結果をもとに，調査対象の教師は英語教育の領域では同一の社会・文化的背景を持つ(同一のマクロシステムにある)ものの，異なった地域環境(エクソシステム)，学校環境(メゾシステム)，個人内環境(マイクロシステム)が複雑にからみ合いながら現在の個々の教師の状態を形作っているとしている。本研究から得られた示唆として，動機づけや国際的志向性あるいは教師としてのビリーフは環境要因で変化する可能性があるが，学習者として得た学習ビリーフは変化しにくく，外国語学習指導実践が学習ビリーフの影響を受けている可能性があるとしている。また，教師の自律性を高める教師支援が教師の意欲を高めることが研究結果から示唆されており，これからの小学校英語教育に，これまで小学校教師たちが培ってきた英語教育の成果を生かす方向性を主張している。